

発掘調査の概要

山田道の調査（飛鳥藤原第193・194次）

2017年4月10日から6月29日まで、飛鳥資料館のすぐ南西の地で、店舗新築にともなう発掘調査をおこないました。調査地の北を東西に走る県道と同じ位置に古代の山田道が想定されており、調査地西方でみつかった山田道南側溝の東延長部分が検出されることが期待されました。

北区と南区にわけて調査区を設定し、面積はあわせて380㎡と、それほど広いものではありませんが、調査の結果、古墳時代から飛鳥時代にかけての様々な遺構や遺物が確認されました。特筆すべき遺構としては、北区でみつかった山田道南側溝と推定される東西溝や、南区に広がる池状遺構等の飛鳥時代の遺構と、池状遺構の直下からみつかった古墳時代前期の木質遺物集中部があげられます。

まず東西溝はその規模や位置からみて、西方の石神遺跡周辺で検出されている山田道南側溝と一連のものと考えられます。確かなものとしては、もっとも東での検出例です。県道の北側でみつかった山田道北側溝との間隔はおよそ21～22m。下の写真は想定される山田道の中心から撮ったものです。飛鳥時代には現在の県道の倍以上の規模の道路が、雷丘の方へ向かってまっすぐ延びていました。

次は南区でみつかった池状遺構です。調査地周辺の現地形は南から北西に向かって緩やかに傾斜しており、実は私たちも調査を始めるまで、ここに飛鳥時代の池状遺構があるとはまったく想定していませんでした。掘り下げてすぐにわかったのは、たくさ

んの土器や木製品が出土する湿地状の落ち込みがどうやら南区全体に広がっていて、飛鳥時代後半に人為的に埋め立てられた、ということくらいでした。これだけで、沼のような自然地形を埋め立てた可能性も十分に考えられます。

その後、手探り状態で発掘調査を進めていった結果、新たな発見がありました。落ち込みの下から、古墳時代前期の土師器とともに漆塗弓や鞘等の木製品が大量に出土したのです。これは、少なくとも古墳時代前期までは落ち込みの底で人間が活動していたことを示しています。底面まで掘り下げることによってこの巨大な落ち込みが、古墳時代前期まであった谷状の地形を利用して、古墳時代後期から飛鳥時代前半にかけて築造された溜池である可能性が高いことがわかりました。この調査所見は、地質学的分析によっても裏づけられています。今後、周辺の発掘調査によって堤等を検出し、規模を確定する必要はありますが、発掘されたものとしては橿原市の磐余池と並ぶ、県内でも最古級の溜池がこの地にあった可能性が初めて出てきました。

なおこの池状遺構は、山田道の敷設後、藤原京の造営が本格化する飛鳥時代後半には完全に埋め立てられてしまいます。南東から北西へと緩やかに傾斜する現在の景観は、この時の大土木工事によって生まれたものだったのです。現在ののどかな田園風景からは想像もできないような古代の地形改変の痕跡が、飛鳥の地下にはまだまだ眠っている。そのことを確信させるとともに、我々がその情報を遺跡からきちんと引き出すことの大切さを、改めて考えさせられる調査でした。（都城発掘調査部 諫早 直人）



北区東西溝および想定される山田道（東から）



南区池状遺構と木質遺物集中部（南東から）